

7月の栽培管理

リンゴ

○生育状況

7月1日現在の果実肥大は、平年並～やや小さめとなっている。

表1 県南部のリンゴの肥大状況（果樹試験場：横手市 令和7年7月1日現在）

品 種	調査項目	計測値			対 比	
		本年	平年	前年	平年(%)	前年(%)
つがる	果重(g)	51.7	62.3	79.7	83	65
	縦径(cm)	4.44	4.71	5.24	94	85
	横径(cm)	5.00	5.25	5.81	95	86
王 林	果重(g)	48.4	53.6	62.3	90	78
	縦径(cm)	4.93	5.01	5.14	98	96
	横径(cm)	4.56	4.67	4.99	98	91
ふ じ	果重(g)	35.7	44.8	52.5	80	68
	縦径(cm)	3.98	4.19	4.50	95	88
	横径(cm)	4.39	4.60	4.91	95	89

1 見直し摘果

摘果が遅れると翌年の花芽形成や樹勢へ悪影響が出るので、仕上げ摘果が終わっていない場合は早急に作業を行い、着果負担を軽減する。

見直し摘果では、着果位置や間隔(20cm程度)を考慮し作業を進める。小玉や果形不良、病虫害被害果などの品質不良果を取り除くほか、20cm以上の長い枝の果実、枝擦れする果実など、商品性が期待できない果実は摘果する。樹勢の弱い木や日当たりの悪い枝は強めに摘果し、樹勢の強い木や日当たり条件の良い枝ではやや多めに着果させるなど、状況に応じた着果管理を行う。なお、品種別の着果基準は表のとおりである。

表 品種別着果基準

3~4頂芽に1果		4~5頂芽に1果	
つがる	王林	ふじ	さんさ
千秋	秋田紅あかり	シナスイート	シナゴールド
秋田紅ほっぺ	紅玉	ジョナゴールド	きおう

2 樹体管理

(1) 苗木の新梢管理

苗木では主幹延長枝と競合する強い新梢を剪去するほか、側枝候補となる新梢が強くなるように誘引する。

(2) 成木の徒長枝管理

樹勢の強い木では徒長枝が繁茂し、樹冠内部への光や薬剤の透過性が悪くなることから、摘果作業が終了した頃を目安に早めに徒長枝を剪去する。

主枝の基部や主枝から側枝が分岐する部分の徒長枝は丁寧に剪去する。ただし、過度に剪去すると、主枝等骨格枝の背面に日焼けを起こしたり、二次伸長を誘発する恐れがある。適当な間隔で弱めのものを残し、剪去しすぎないように注意する。なお、徒長枝を剪去するときは、基部を残さずきれいに切り、再発生を抑える。

(3) 側枝の管理

開心形樹では、側枝が下がり樹冠内部に光が到達しなくなるところに支柱を入れて持ち上げる。わい性台樹等主幹形樹の下部の側枝は、果実の肥大とともに下垂して枝が折損したり、地面に接したりすることがある。このような側枝は早めにひもでつり上げ、適当な位置に保持する。

ブドウ

○生育状況

発芽は平年並みとなった。満開は「キャンベル・アーリー」で平年よりやや早く、「巨峰」、「シャインマスカット」では概ね平年並みとなった。6月16日現在、新梢長が「巨峰」で短くやや生育不良気味、「シャインマスカット」で長くやや徒長気味であるが、他は平年並みと考えられる（表1）。

表1 ブドウの生育状況（果樹試験場：横手市 令和7年6月16日現在）

品 種	調査項目	計 測 値			対 比	
		本年	平年	前年	平年(%)	前年(%)
キャンベル・アーリー	新梢長(cm)	124.2	130.5	146.1	95	85
	展葉数(枚)	11.8	12.7	15.1	93	78
	花穂長(cm)	15.7	15.4	18.3	102	86
巨 峰（無核）	新梢長(cm)	94.1	118.7	134.8	79	70
	展葉数(枚)	12.4	12.7	14.7	98	84
	花穂長(cm)	23.0	21.6	26.1	106	88
シャインマスカット	新梢長(cm)	160.9	119.4	159.7	135	101
	展葉数(枚)	12.3	11.1	13.3	111	92
	花穂長(cm)	26.1	24.8	28.2	105	93

※ブドウの定期調査は7月は実施しない

「キャンベル・アーリー」、「巨峰」は露地栽培、「シャインマスカット」は被覆栽培

1 中粒品種の摘粒と着果量

「キャンベル・アーリー」、「スチューベン」は目標果房重を300g程度とし、着粒数はそれぞれ60粒、65粒程度を目安とする。

摘粒は果房を縦方向に1～2列（2列の場合は果房の表面と裏面各1列）果粒を外し、溝が埋まりやすいように果房全体を軽くひねる。

着房数は強めの新梢では2房、中庸～弱めの新梢（80～150cm）では1房とする。ごく弱い新梢には着房させない。最終的な着房数は「キャンベル・アーリー」で1m²あたり8～9房、「スチューベン」で1m²あたり6～7房に調整する。

2 大粒品種の摘粒と着果量

大粒品種では、外に張り出した大きな果粒を除去し、果房最上部は穂軸を覆うように上向きの果粒を残す。房肩から房尻に向かって着粒数が少なくなるように調整し、収穫時きれいな円筒形になるように仕上げる。

(1) 無核栽培

①「巨峰」、「ピオーネ」および赤系大粒品種

目標果房重は400～450g。着粒数は「巨峰」で32～36粒、「ピオーネ」および赤系大粒品種で30粒程度を目安とする。「巨峰」の摘粒は、果房上部から1支梗あたり4粒で3段、次に3粒で3段、2粒で6段、1粒で3段を目安に調整する。

②「シャインマスカット」

目標果房重は600～700gで着粒数は45粒程度。700gを超える大房は目標糖度18%に達しない場合が多いので、着粒数を多くしない。主穂が二股や帯状の果房は、果粒が小さいうちに余分な支梗や果粒を摘除することで房型が整いやすい(図1)。

いずれの品種とも摘粒作業は7月中を目途に終了する。最終的な着房数は、1m²あたり2～3房(10aあたり2,500房)に調整する。



図1 「シャインマスカット」の摘粒前後の果房

図2 縮果症の果粒

(2) 有核栽培

「巨峰」、「安芸クイーン」などは満開15日後には有核果粒(長楕円)と無核果粒(小さな正円)の見分けがつくので、無核果粒を除去する。着粒数は無核栽培での目安を参考にし、摘粒作業は7月15日を目途に終わらせる。

無核果粒の混入が多い場合は、満開15～20日後にフルメット液剤(5～10ppm)に果房を浸漬し、果粒肥大を促す。

目標果房重が350～400gの場合、最終的な着房数は1m²あたり3房(10aあたり3,000房)に調整する。

摘房は着粒数が少ないバラ房、形状が劣る房などを対象に行う。また、30cm以下の弱めの新梢では良果は得られないため、早めに摘房する。

3 袋かけ

摘粒後の袋かけは薬剤散布後速やかに行う。また、大粒品種では、縮果症(図2)が発生する場合があるのでよく観察し、障害果粒を摘粒してから袋かけを行う。

4 新梢管理

棚面が暗い園地では、果実品質の低下、枝の登熟不足を招き、薬剤の透過性も悪いため、棚下に木漏れ日が入る程度に新梢や副梢を整理する。

○生育状況

7月1日現在の果実肥大は平年並み～やや大きい（表1）。硬核期の開始は平年並であったが、硬核指数3への到達は「あかつき」で平年より5日早い6月30日となり、「川中島白桃」も3日早い7月3日と予想される（表2）。

表1 果実肥大状況（果樹試験場：横手市 令和7年7月1日現在）

品種	調査項目	計測値			対比	
		本年	平年	前年	平年(%)	前年(%)
あかつき	縦径(cm)	4.95	4.52	4.91	110	101
	横径(cm)	5.02	4.63	4.92	108	102
	側径(cm)	4.66	4.35	4.73	107	99
川中島白桃	縦径(cm)	4.83	4.60	4.90	105	99
	横径(cm)	4.97	4.73	5.03	105	99
	側径(cm)	4.40	4.28	4.63	103	95

※本年より調査圃場、調査樹を変更。平年値・前年値・対比は参考のため示す

表2 硬核期（果樹試験場：横手市 令和7年7月1日現在）

品種	硬核期始め	硬核指数3 ^{注2)} 到達日
あかつき	6/17 (-1) ^{注1)}	6/30 (-5)
川中島白桃	6/19 (±0)	7/3 (-3 予想)

^{注1)} () 内は平年差

^{注2)} 硬核指数は硬核期の進行程度を表し、指数0.5で硬核期の開始、指数4で硬核期の終了を示す。硬核期の終盤である指数3を越えてから、新梢管理や修正摘果を行う。

1 修正摘果

修正摘果は樹上で選果するつもりで硬核期終了の少し前（硬核指数3以後）の7月初旬から実施する。着果過多を修正するとともに、果形不良果、発育不良果、病虫被害果などを確実に摘果する。

また、褐色斑点症状（図3）は、リンゴうどんこ病菌によるもので、「あかつき」や「黄貴妃」で発生が多い。収穫期には外観上目立たなくなる場合があるが、サビとして残る場合があるため、症状がひどい果実を優先して摘果する。



図3 褐色斑点症状

2 新梢管理

モモは頂部優勢性が崩れやすく、容易に樹形が乱れるので、新梢管理を徹底する。

定植当年は、第1主枝候補枝より下の主幹部から発出した枝は基部から剪去する。主枝延長枝の勢力を維持するために主枝延長枝と競合する強い枝は基部葉を残して剪去する。側枝候補枝は強くなならないように水平近くまで誘引する。定植2年目以降も同様に管理し、骨格枝の形成に努める。

成木では、過繁茂となっている主枝や亜主枝などの背面の徒長枝の摘心や剪除を行い受光態勢を改善する。ただし、日焼けや樹勢衰弱を招かないよう、取り過ぎに注意する。

3. せん孔細菌病の耕種的防除（春型枝病斑の除去）

せん孔細菌病は薬剤のみで防除することは難しいため、積極的に耕種的防除を組み合わせ対応する。

春型枝病斑は、開花期頃から2年枝に紫褐色～紫黒色の病斑が確認できる。枝病斑は5月をピークとして7月まで感染が続くほか、果実や葉への伝染源となる。このため、発生を確認したらすぐ枝病斑から数cm離れた位置で切り戻し、密度低下を図る。

